

15 - 16 世紀の Göynük 郡

多 田 守

序

15 - 16 世紀に作成された検地帳については、特に 1980 年代以降その内容が次々と紹介され始め、しかもこの研究動向は単なる解説や分析に留まることなく、得られた諸情報の更なる検討を通して、人々の食料実態 [Öz 1997: 77 - 90], 作物の生産性 [Öz 2002: 1643 - 1651] 等の、より具体的な課題の究明へと向かい、掘り下げた考察が為されつつある。

ただ周知の如く、検地帳は租税徴収を主目的としながらも、その支配秩序を維持するためにあくまでも行財政上の必要性という観点から作成されたものであり、決して当時の生産状況等があるがままに反映したものではない。それ故それに拠り得られた情報を、よりの確に把握し、活用するためにも、引き続き様々な角度から分析が為されると共に、検地帳が内包する新たな史的価値が探求されて、より重層的且つ複眼的な視角の下に、その情報が評価され、利用される必要がある。

そこで小論では、検地帳の分析を通して耕地利用の実態の解明を試み、それに拠り reaya を取り巻く諸状況の一端を明らかにすると共に、検地帳に基づく研究に、新たな一視点を提示できればと考える。なお研究対象として取り上げるのは、15 世紀後半から 16 世紀後半にかけての Göynük 郡 (当時は Hüdavendigâr 県に、現在は Bolu 県に所属している) である。これは、1) Barkan, Ö.L.-Meriçli, E. により Hüdavendigâr 県の検地帳が校訂、出版され、中でも同郡については、3 つの時期 (A 期: 892/1487 年, B 期: 928/1521 年, C: 981/1573 年) に関する調査結果がまとめられており¹⁾、時代の経過に伴う変化を理解し得

1) Başvekâlet arşiviTTD, No.23 他 (A 期), 同 No.111 他 (B 期), Tapu ve Kadastro arşivi No.67 他 (C 期) を利用してまとめられた [HTD: 66 - 67]。各村毎に hasıl 額及び収穫物の内訳が記されているが、reaya の名前は掲載されていない。なお B, C 期については mülk や vakıf 地の検地結果もまとめられている。A 期 (Bayezid II 世時代) の検地は、以後のその範とされたもので、この時作成された検地帳の巻頭に付された kanunname は、[AKG 2: 186 - 187] に収録されている。B 期 (Süleyman I 世時代) の検地帳は、新 sultan の即位に伴い作成されたもので、この内容検討に当たっては MVA (937/1530 年作成) も参照した。C 期 (Selim II 世時代) の検地 [AKG 2: 179 - 180] は、MD に拠ると sultan の交替により既に 1568 年 1 月以前には開始されていたことが分かる [MD 7/1: 294] が、調査責任者の交替 [MD 7/1: 370; 7/2: 716], Kıbrıs 遠征の開始 [ST: 102] 等の故に、完了までに長期間を用した。

る、2) 同郡は15世紀後半から20世紀初頭に至る凡そ400年余りの間、その郡域に大きな変化はなく、しかも山間に位置して交易の主要路からも外れ、多分に停滞性を帯びた地域であり、15-16世紀における諸情報と20世紀初頭のそれとの比較、対照が可能であり、過去を理解する上で有力な手掛かりを有する地域である²⁾、3) 同郡の農業生産物は他地域に比べ多様で³⁾、各収穫量の変化が社会状況の変化を読み取る手掛かりとなり得る、と考えられるからである。

I 地理的環境と歴史

郡都 Göynük は、Bursa から約 196 km、Bolu から約 96 km の地点に位置し、その標高は 700 m 程度である。郡の面積は約 1,520 km² (1940 年代後半以降 1,473 km²、次いで 1,437 km²) で、その 85% が山、1.2% が高原、3.7% が平地、10.1% が起伏地となっており、とりわけ山々の北斜面は森林で覆われている⁴⁾ [İştıman 1938: 17; Konuk 1967: 34; KİB: 14]。

そして丁度乾燥した内陸部と湿気のある黒海沿岸部との中間に位置し、北部地域及び標高の高い所では湿気が高く、南部地域と平地部分では比較的乾燥している。年平均気温は約 10.5 度、降水量は 550 mm 前後で、冬(雪)と春(雨)に集中(約 68%)している。最終氷結は 3 月 1 日-3 月 15 日頃、初氷結は 11 月 1 日-12 月 30 日頃、また初雪は 11 月 15 日頃、最終降雪日は 4 月 15 日頃で、平均積雪日数は 40 日程度である⁵⁾ [Gözenç 1985: 35; BİY

2) 郡域の端に位置する Çubuk (現代名 Çubuk) [北], Embanus (Gembenus) [東北], Sarı (Sarılar) [東], Çapar (Çapar) [東南], Çatak (Çatacık) [南], Hırka (Yenipazar) [西南], Nakkarezen (Narzanlar) [西], Kulağuz (Kılavuzlar) [西北] 等の村々は、15-16 世紀はもとより 20 世紀においても存在し、一致する [Ha; Hb; MVA: harita]。ただ 1940 年代後半以降、Yenipazar, Danişment 等の西南一部地域が西隣の Gölpazarı 郡に編入される等、郡域は 5% 程度縮小している [BİİY: 11, 15; BİY: 93, 96-99, 152; KB: 158-159, 194, 196-197]。なお Bolu 地方は、20 世紀前半においてですらその商業活動は、ほとんど地方内の町村間に限られたもので、農民は何よりも自家消費のために栽培している有様で [İştıman 1938: 83-85]、中でも Göynük 郡は最も都市化の鈍い地域と言われている [BİY: 52]。

3) 小麦, 大麦, yulaf (からす麦), darı (黍), mahlut (混合穀物), burçak (連理草類), fiğ (からすの豌豆), iza (?) 等が収穫がされている [Öz 1999: 94-95; Ünal 1999: 106; Karaca 2002: 246; Gögebakan 2002: 334]。この多様性は、現代でも同郡を含む Bolu 地方の特徴である [BİY: 325]。

4) 北方は Kapıormanı 山脈に遮られ通行不能、南方 Nallıhan へ向かうには Kocaman 山脈が横たわり Meyitler 峠 (1,180 m), Atyalası 峠 (1,270 m) を、また東方 Mudrunu へは Hacıayaz 峠 (1,080 m) を越えねばならない。この Hacıayaz 峠は、İbn Battuta の時代と同様、20 世紀中頃においてですら冬季の通行は困難で、唯一 Göynük 川沿いの Taraklı との街道のみが容易なものであった [Orak 1946: 688; İbn Battuta 1969: 138-139]。

5) 20 世紀前半の農民は、小麦の播種時期 (1960 年代では 10 月 1-15 日頃開始) が到来しても、11 月初日までに強い一雨が降らない限り (降る確立は低い) 播種せず、また寒気が来ると中止して翌春行方。実質 2 週間程で為されなければならないが、原初的な農耕具の故に満足な播種は困

1967: 118, 120; KİB: 18-19; Onur 1964: 146, 148, 152]。

次いで、同郡の歴史について概観して置く。同郡は、西北 Anatolia においては征服が最も遅れた地域の内の一つで、征服は最終的に 731-735/1330-1335 年頃 Orhan の皇子 Süleyman Paşa によって達成されている [AT: 43; NT/1: 162, 164; HT: 65]。なお諸史料は、征服後住民達が muslim になったと述べているが、同時期に訪れた İbn Battuta は、代官以外は皆異教徒であると述べている [同 1969: 138]。そしてこのような経緯の故にか理由は定かではないが、Bayezid I 世は Bizans 皇帝との交渉で Constantinople 内の一区画に muslim の居住を認めさせた際、同郡の住民を移住させている [AT: 62; NT/1: 330; HT: 116]。その後、同郡に関する目立った出来事は伝えられていない。ただ 16 世紀後半になると、他の Anatolia 地方同様、同郡においても治安の悪化や統治の緩みを伝える記述がしばしば見られるようになる [MD3: 78-79, 205; 6: 56, 63; 7: 458]。なおこのような社会不安の終着点ともいえる Celâli 諸反乱の後、17 世紀の中頃同地を訪れた Evliya Çelebi は、Göynük の町について、2,000 戸の松の板で覆われた家屋、25 軒の商店、そして 1 つの hammam 等が存在するかわいらしい町であると記している [SNb 2: 243b-244a]。その後同郡は、やはり他の地方と同様、所謂 derebeyi の支配下に入っている [Konrapa 1960: 31]。

ところで同郡は、地方行政区画上何れに属していたのであろうか。検地帳に拠れば、15 世紀後半から 16 世紀後半かけて Hüdavendigar 県に属していたことは明白であるが、この時期以前については不明である。以後についても情報は少なく、17 世紀中頃には Bolu 県に [SNa II: 737]、また 1831 年には Hüdavendigar 県に属していたこと [Karpas 2003: 150] が分かる程度である。結局、明確になるのは 19 世紀後半以降のことである。この時期は目まぐるしく行政区画が変更されているものの、同郡は常に Bolu 地方と同一区画に属している [Konrapa 1960: 357-638; Birken 1976: 128; TA 1: 228-229]。

II 人 口

人口に関する諸情報については、表 Ia の如くにまとめられる。周知の如く、人口推定はこれまで様々な手法で試みられてきた ([Göyünç 1979: 331-333] 参照)。中でも hane 数に基づく算出法では、1 hane 当たりの人数を何人と仮定するのかを巡り種々の意見が提示されてきた [Sümer: 461a; Cook 1972: 85, 90, 98; Cohen-Lewis 1978: 14-15] が、今なお Barkan, Ö. L. による 5 という係数 [同 1951: 1-26] が、一般的な支持を得ている [Mir-

↓ 難で、手作業の場合 1 日の播種面積は 1 dönüm (約 919.3 m² [注 7 参照]) 程度であった。なお春に播種した場合、生産性は大変低い [KİB: 21; TCZ 1938: 69-70]。

表 I a hane, mücerred の数 (単位: hane=hane, mücerred=人)

	hane ⁱ⁾ (i は表注の番号, 以下同じ)					mücerred ⁱⁱ⁾			
	miri 地		mülk 地	vakıf 地	合 計	miri 地	mülk 地	vakıf 地	合 計
	reaya 及び muaf ⁱⁱⁱ⁾	yaya 及び müsellem							
A	1,296				1,296	302			302
B	1,317 (57)		77	99	1,493	715	58	9	782
C	1,994 (73)	168	135	30	2,327	2,509	51	11	2,571

- i) hane は一つの屋根の下に住む一家庭というよりも、むしろ徴税単位を表すものと説明される [Güyünc 1979: 331; Faroqhi-Erder 1979: 334-335; İncalcık 1994/1: 25-29]。
 ii) mücerred については, Barkan, Ö. L. が 12-14 才と述べて以来, 年齢下限としてこの年頃が一般的に受け入れられている [Mcgowan 1969: 157-164; Cook 1972: 64-65; Dávid 1977: 347-357]。なお Cook, M. A. は, 当初 mücerred の登録は厳密には行われず, 次第に徹底されるようになったと述べている [同 1972: 26-27]。
 iii) () 内は muaf の数。

oğlu 1975: 119; Faroqhi 1983: 221; Doğru 1992: 52, 117; Çınar-Gümüşcü 2002: 95-96]。ただその他にも hane×5 で算出された数値に mücerred (独身者) の数を加算する方法 [Emecan 1989: 156; Kurt 1990: 185; Gökçe 2002: 95-96; Gögebakan 2002: 191], また一方で 1 hane の人数が不明確であることから, 人口統計学の成果を利用して, 成人男性数に基づいて総人口を割出す算出法 (総人口=成人男性数×2.72~4.31) も提示されている [Mcgowan 1969: 162; Faroqhi-Erder 1979: 334-335; Öz 1999: 58, 62-64]。人口推定に当たり, 明確な根拠を持ち合わせていない現在, 成人男性数に拠る算出法はやむを得ないものであると考えられる。しかし mücerred を加算する方法については, Venzke, M. L. や Öz, M. 同様 [Venzke 1997: 8; Öz 1999: 58] 疑問が残る。何故なら, 1) 各村の hane 数及び mücerred 数に基づいて çift 税総額を算出し, 検討すると, A, B 期においては mücerred 税は徴収されていなかったことが分かる。即ち彼等の存在は同期においては税対象ではなく, Cook, M. A. が指摘した如く, 人数は正確に記されていない, 2) 例えば Bolu 県では, çift 税が高額であるため mücerred 税は徴収されていない [Bar: 36]。即ち, 彼等は基本的に hane に包含されるべき者達である, と考えられるからである。

そこでこれまでの議論を踏まえつつ (勿論中には統一的な係数の設定に疑問を呈する研究者 [Venzke 1997: 8] も居るが), やはり私も hane×5 人で概数を提示することとする。

ところで, muaf (sipahi を始め諸税免除と引き替えに様々な奉仕遂行の義務を負った者) 達の中で, 特異な組織を維持していた yaya, müsellem の人口については, reaya や他の muaf 達とは別に, 異なった角度から検討を加えなければならない。本来ならば彼等を対象とした検地帳を利用すべきところであるが, 私はその存在を確認し得ていない (A, B 期においても yaya, müsellem は存在していたようである [HTD: 530])。そこで先行研究の成果を利用しつつ考えてみたい。1人の yaya, müsellem を中心に構成された所謂 ocak には, yamak 及び彼等の家族の他に地域によっては一般の reaya 等も含まれていた [Kütükoğlu 2000: 113]。しかも検地帳の記載方法は各地域によって異なっており [Emecan 1989: 144,

156; Yılmaz 1999: 170-179; Kütükoğlu 2000: 113], それ故全 ocak の人口算出方法についても研究者 [Emecan 1989: 155-156; Kütükoğlu 2000: 113, 116; Gökçe 2000: 312] により異なっている。ただ Göynük 郡において知り得た情報は, yaya, müselleme の hane 数即ち ocak 数のみである。そこで先行研究に拠り, 1 ocak 当たりの yaya (müselleme)-yamak 数, 即ち成人男性数を割出し, これを基に前述した方法(便宜上 2.72 ~ 4.31 の平均値である 3.52 を利用する)で 1 ocak の, 更には全 ocak の, 即ち yaya, müselleme 関係の人口を算出することとする。すると各地域の 1 ocak における平均的な yaya (müselleme)-yamak 数は, 表 I b の如くなる。これに拠ると, 16 世紀前半においては凡そ 7 人, 後半

表 I b 1 ocak 当たりの yaya (müselleme)-yamak の数 (単位: 人)

	年代	ocak 数	yaya(müselleme)-yamak の人数	1 ocak 当たりの yaya (müselleme)-yamak の人数	備考
Manisa 郡	1545	60	429	7.2	[Emecan 1989: 144-145]
	1575	58	440	7.6	
Lazıkıyye 郡	1530-31	101	713	7.1	[Gökçe 2000: 269]
	1571	97	942	9.7	
İzmir 郡	1525-26	155	988	6.4	[Kütükoğlu 2000: 113]
	1545-46	147	1,166	7.9	
Edremid 郡	1530-31	41	170	4.1	[Yılmaz 1999: 170-179]
	1551-52	12	74	6.2	
Teke 県	1530	366	2,487	6.8	[Karaca 2002: 217-218]
	1545	387	2,548	6.6	
	1568	383	2,901	7.6	

表 I c 人口 (単位: 人)

	miri 地		mülk 地	vakıf 地	合計 ⁱ⁾
	reaya 及び muaf	yaya 及び müselleme			
A	6,480				6,480
B	6,585		385	495	7,465
C	9,970	4,724	675	150	15,519
1882/83					27,199
1914					19,176
1927					16,583

i) 1882/83 年 (16,150 人); 1914 年 (19,176 人) [Karpas 2003: 180-181, 222-223]; 1927 年 (16,583 人) [BİY: 152] の調査結果の平均値を 20 世紀初頭の人口規模と見做すこととする。ただ 1882/83 年の人数 (kadın 8,377 人+erkek 7,762 +その他 11) には子供が含まれていないと考えられる。何故ならその成人男性数は, 徴税や軍役等を目的として同国で初めて行われた 1831 年の調査結果 (7,834 人: 成人男性のみ調査対象) [Karpas 2003: 58, 150] とほぼ同数だからである。[Sami 1896/5: 3932 a] は, 1890 年代の人口を 16,662 人と記している。恐らく同様の方法に基づく調査結果を利用したためであろう。それ故 1882/83 年の人口は, 成人男性数に基づいた人数に改めた (ただ 1831 年, 1882/83 年の結果については, 疑問点も存する [McCarthy 2002: 111-112])。なお 1914, 1927 年における減少は, 第 1 次大戦前後の混乱, 並びに郡外への流出 [BİY: 152] (例えば, Gerede 郡の人々も多数 İstanbul, İzmir 等に移住している [Ünlü 1925: 270]) によるものであろう。

表 I d reaya の内訳

	A		B		C	
çift 保有者	148 戸	15.3%	108 戸	11.4%	49 戸	3.7%
nim-çift 保有者	333 戸	34.4%	395 戸	41.7%	139 戸	10.3%
ekinlü bennak	228 戸	23.6%	307 戸	32.4%	564 戸	41.9%
bennak	259 戸	26.7%	137 戸	14.5%	594 戸	44.1%
合計	968 戸	100%	947 戸	100%	1,346 戸	100%
mücerred	297 人		599 人		2,140 人	
haric raiyyat の耕地面積	198.5 çift		221.48 çift		172.5 çift	
resm-i zemin 額					5,548 akçe	

では 8 人程度であったと考えられる⁶⁾。

さて以上の如き仮定に基づき人口を算出すると、表 I c の如くなる。A、B 期はほぼ同規模で、以後急増したことが分かる。そしてその内訳（表 I d）を見ると、C 期において çift, nim-çift 保有者が激減し、bennak が急増している。

なお 20 世紀初頭の人口は、20,986 人程と考えられる（表 I c 注 i 参照）。

III 耕地面積

miri 地における耕地面積については、先行研究に倣い、1 çift は中質地の場合の 100 dönüm⁷⁾、nim-çift は 50 dönüm、nim-çift より狭い耕地を耕作した ekinlü bennak は Cook, M. A. により提示された 1/4 çift 即ち 25 dönüm [同 1972: 70]、resm-i zemin は 3 dönüm につき 1 akçe 徴収されたものとして算出する（表 II a 注参照）。

一方 hasıl（税額）で表示されてる mezraa⁸⁾、hane 数のみしか記されていない yaya, müsellemin の保有地、そして mülk 地や vakıf 地における耕地面積については、次の如き仮定に基づき算出する。まず mezraa については、各期の穀類の総 öşür 量を現金化（表 III c 参照）し、これを対応する耕地面積（表 II a 参照）で除して、これに抛り得られた数値に 1 çift の çift 税即ち 33 akçe を加えて、1 çift 当たりの平均 hasıl 額を導き出し、この額で各

6) Yılmaz, F. は、私の試算より多目に 1 ocak の人口は、平均 40～50 人と述べている [同 1999: 156]。

7) 1 dönüm は 40 歩×40 歩の広さで、[Stratil-Sauer 1933: 325] は約 912.2 m²、[1905 ZI: ث ; 永田 1977: 69; İnalçık 1994 1: XXXVIII] は約 919.3 m²、[1907 ZI: ث] は約 920 m²、更に [Redhouse 1974: 928b; Káldy-Nagy 1968: 211; Faroqhi 1983: 233] は約 939.3 m² としている。目下私は決定的情報を有しておらず、小論では 1905 ZI のそれに従うこととする。

8) 耕作は為されたものの、reaya が継続的には居住しなかった場所 [İnalçık 1994/1: 62-167]。小論では、reaya が居住していなかったことから、穀類等（小麦、大麦、yulaf, darı, mahlut, burçak, fig, iza）のみが栽培されていたと見做すこととする。

表IIa 耕地面積 (単位: çift)

	miri 地											mülk 地	vakıf 地	総合計	
	çift ⁱ⁾	nim-çift	ekinlü bennak ⁱⁱ⁾	haric raiyyat ⁱⁱⁱ⁾	resm-i zemin ^{iv)}	小 計		hassa çiftliği 地 ^{v)}	yaya 及び müsellemler	mezraa (他 ^{vi)})	新開地 ^{vii)}				miri 地合計
A	148	166.5	57	191.5		563.0	*522.5 ^{ix)}	33.7		34.73 _(24.5)		631.43			631.43
B	109	197.5	76.75	210		593.25	*531.0	32.92		51.79 _(11.5)		677.96	62.94	51.87	792.77
C	51	68.5	138.5	167	165.48	590.48	*558.89	27.5	168	50 ₍₃₎	0.43	836.41	62.94	67.74	967.09
1907-08															2,496.4 ^{ix)}
1911															1,997.7
1927															1,515.4

- i) 地域及び肥沃度による広さの違いについては〔永田 1977: 56〕を見よ。
- ii) kanunname の規定に基づく、中質地の場合 ekinlü bennak は 6-36 dönüm の耕地を保有していたことになる〔İnalçık 1959: 592〕。Öz, M.〔同 1999: 191〕, Çınar-Gümüşcü〔同 2002: 119〕も 1/4 çift 程度と見做している。
- iii) yörük や haymana 等の村外の者がある村で耕作したり、或いは村内の raiyyat が保有量以上耕作した場合等に、このように呼ばれる。〔İnalçık 1959: 592-593; Özel 1986: 160-170〕を見よ。
- iiii) dönüm akçisi とも呼ばれる。〔AKG 2: 186; BK: 45 f〕を見よ。
- v) 各々 1 çift の広さ。sipahi 保有の çiftlik も含めた。
- vi) () 内は çiftlik-i muattal の広さ。
- vii) C 期の 19 村 (大部分枝村) で言及されているが、その内広さが記されているのは 5 村のみ (合計 102 kilelik [1 kilelik = 0.42 dönüm]) である。新開地の広さについては推測のしようがないものの、広大なものではなかったようである。なお 19 世紀中頃の Kastamonu 地方では、2-3 dönüm の広さで焼畑が行われている。〔Güran 1998: 89〕。
- viii) 耕地面積は確認し得るものの ölçür 量が未記載の村々、また yurt と呼ばれる特異な形態で治められていた村々 (A 期 = 4 村, B 期 = 5 村, C 期 = 5 村) の耕地面積の広さを、miri 地小計より減じたものが * を付した数値である。
- ix) 1960 年代後半の調査に拠ると、同郡では穀地の 4.4% で灌漑、95.6% で乾地農法 (88.4% = 二圃農法, 11.6% = 毎年耕作) が行われ〔KİB: 63〕, 穀地の内の約 57.8% で作付されている。なおこの二圃農法の占める割合は、当時の Bolu 県においては際立って高いものである〔KİB: 62-63〕。一方同時期の全国平均作付率は、約 64.9% である〔TG 2001: 1〕。ただこれ (全国平均) は、56.9% (1952 年), 56.0% (1949 年), 53.8% (1944 年) と、時代を遡るに従い低下しており〔鴨沢 1960: 159〕, 恐らく同郡においても同様の傾向にあったものと思われる。19 世紀中頃の Filibe 県内の農村研究を行った Güran, T. は、平均して作付地が 47%, 休閑地が 47%, bağ 等が 6% を占めていたと述べ〔同 1998: 191〕, 永田も伝統的農業を二圃農法と理解している〔同 1986: 125〕。そこで、実態との間に少々誤差は生じるかもしれないが、20 世紀初頭同郡では、穀地は完全に二圃農法で作付されていたものと見做すこととする。それ故耕地面積は穀類の作付地を 2 倍し、それに豆類 (burçak, fiğ を除く), 工芸作物等の面積を加えて求める (表 IVa 参照)。

mezraa の hasil 額を除いてその耕地面積を割出す。次いで yaya 達について考える。先行研究に拠り、各地域における 1 ocak の平均的耕地保有面積を求めると、表 II b に見られる如く 16 世紀全般に亘って 1 çift 前後であることが分かる。周知の如く、彼等は元来 1 çift の耕地保有の代償として、奉仕遂行の義務を負っていた。それ故、本郡に存在した彼等に関しても、各々が 1 çift の耕地を保有していたものと見做すこととする。更に mülk 及び vakıf 地 (C 期の情報は B 期のそれをほぼ踏襲したものであると思われる) については、9/69 箇所 (mülk 地), 26/56 箇所 (vakıf 地) において、その耕地面積が記されていないことから、明記されている箇所の数値を基に、各々の 1 箇所当たりの平均的広さを割出し、これを基に未記載の箇所の広さを推定して、各々の耕地面積と見做すこととする。

さて、以上の如き仮定に基づき算出された広さの一覧表が表 II a である。これに拠ると、

表 II b I ocak の保有耕地面積 (単位: dönüm)

	年代	I ocak 当 たりの保有 耕地面積	備	考
Manisa 郡	1545	140.7	1 çift = 上質地 70 dönüm, 中質地 100, 下質地 150	[Emecan 1989 : 144, 148]
	1575	115.0		
Lazkiyye 郡	1530 - 31	136.7	1 çift = 上質地 60 dönüm, 中質地 80 - 90, 下質地 120, 最下質地 150	[Gökçe 2000 : 269, 275, 439 - 455]
	1571	120.0		
İzmir 郡	1526 - 27	76.0	1 çift = 上質地 70 dönüm, 中質地 100, 下質地 150	[Kütükoğlu 2000 : 106, 113, 299 - 308]
	1545 - 46	83.4		
Edremit 郡	1530 - 31 1551 - 52	60.0 - 80.0	1 çift = 上質地 60 dönüm, 下質地 150	[Yılmaz 1999 : 155, 179 - 180]
Teke 県	1530 1545 1568	150.0	1 çift = 上質地 60 - 80 dönüm, 中質地 80 - 100, 下質地 100 - 150	[Karaca 2002 : 221]

miri 地に関する限り (yaya, müselleme 地を除く), A 期→C 期の耕地拡大はほんの僅かであったことが分かる。なお次章で考察される収穫量は, 表 II a の miri 地少計欄内の * を付された数字の面積をもつ耕地におけるものである。それ故第 V 章における作付面積に関する考察においても, この耕地面積が前提となる。

なお 20 世紀初頭における同郡の耕地面積は, 約 18,411.4 ha (約 2,003.2 çift) と考えられる (表 II a 注 ix)。

IV 収穫量と税

1 収穫量

収穫量は, kanunname の規定 [AKG 2 : 187] 及び先行研究 [Taştemir 1999 : 160; Gökçe 2000 : 353 - 356; Çınar-Gümüşcü 2002 : 167 - 168] に拠り, öşür 量 × 8⁹⁾ で算出することとする。ただ burçak, fiğ, iza については, 本県の kanunname に規定が見当たらない。判断を下しかねるところではあるが, これらの作物は穀類の如く見做されていた面もあることから¹⁰⁾, やはり × 8 で求めることとする。なお先行研究においても, kanunname に明記されている場合を除き, 同様の方法で算出されている [Gökçe 2000 : 356; Çınar-

9) なおこの öşür 量 (1/8) には, salarlık (当初 öşür 徴収担当者の食料等の費用として, reaya に課せられた税であったが, その後本来的な意味は失われ, 単に öşür に付随する, 或いはそれを補完するものとなった [KA : 1 b; Güçer 1964 : 52 - 53]) が含まれている。ただ, mercimek (レンズ豆), nohut (ひよこ豆) 等の豆類, 綿, 亜麻等については salarlık は徴収されず, öşür 量は 1/10 である [AKG 2 : 187]。

10) burçak は豆類に属する作物であるが, 1905 ZI, 1907 ZI, [Güran 1998 : 75] は穀類, 1911 ZI, 1926 ZI, 1927 ZI は豆類として扱っており, 更に öşür 徴収率 (Aydın 1/10; Mora 1/8 [BAR : 118, 328]) を見ると, この混乱が 15 - 16 世紀においても存在したことが分かる。

表Ⅲa 収穫量 (単位: Bursa müdü)

	小麦 ⁱ⁾	大麦 ⁱⁱ⁾	yulaf ⁱⁱⁱ⁾	darı ^{iv)}	mahlut ^{v)}	burçak ^{vi)}	fig ^{vii)}	iza ^{viii)}	mercimek	nohut
A	5,560	5,000	498.4	28		128	160		5	35
B ^{ix)}	5,370	3,622.4	740	376		138	47.64	104	29.9	43.5
C ^{x)}	4,911.6	3,653.6	2,880.8	974	2,057.6	1,686.6	4		158	20

- i) 20世紀初頭のBolu地方では、kırmızı (穀付き)、kılçıksız (穀無し) 等の数種類が栽培されている [Tevfik 1927: 354; İştıman 1938: 72-73; ML 2: 619-620] (注5参照)。
- ii) 高地、乾燥地、痩せ地に強く、僅かの肥料で十分。作業内容は小麦と同じ [Tevfik 1927: 385-386; İştıman 1938: 73; Tivy 1994: 18-19; TCZ 1938: 86-87; Ünal 1999: 104]。
- iii) からす麦。小麦や大麦栽培が困難な森林の開墾地、湿地帯の造成地、荒廃した çayır 等においてもよく生育する。耕耘は、播種前の一度だけで十分 [Tevfik 1927: 396-401; ML 12: 839; TCZ 1938: 86]。
- iv) 黍。栽培が容易で、山岳地域でも十分育ち、成長が早く、収穫量も多い。 [Tevfik 1927: 404; TCZ 1938: 88; ML 3: 4016; Güran 1998: 97-99; Öz 1999: 89; Ünal 1999: 104]。
- v) 異なる穀物の種子が混合播種され、収穫されたもの。多くの研究者達 [Mcgowan 1969: 167; Emecan 1989: 243; Öz 1999: 87], 百科事典 [ML 8: 239], 農業統計書 [TG 2001: 18] がこのような作物として扱っている。ただ İnalçık, H. は、これを単独の作物と見做し、mahluç (Samsun地方で大麦の如き厚い皮を被った小麦)、或いは野生 oat 麦のことと述べているが、何ら根拠は提示していない。それ故、私も混合穀物と理解することとする。なお異なる作物を混合播種するのは、収量を高めるため [Tevfik 1927: 358; Derleme VIII: 2661-2662] で、組合せは様々 (小麦+ライ麦; yulaf+ライ麦; 大麦+小麦+kaplıca; 他) [Tevfik 1927: 358; Ünlü 1925: 267; Derleme VIII: 2661-2662] であった。そこで私は、16世紀のGöynük郡においては、小麦+yulaf ではなかったかと考える。何故なら、1) 同郡で収穫されている、2) mahlut 1 müdの評価額が60 akçe、小麦120 akçeであることから (表Ⅲb)、評価額が60 akçe未滿の作物でなければならない、3) 秋に播種され得る、4) 20世紀初頭同郡では yulaf と同様穀を有する小麦 (kızılca 小麦等) が栽培されており、16世紀においても然りとするならば、脱穀、製粉等が容易である、からである。
- vi) 連理草類。豆類に属し、fig や mercimek に酷似している。飼料として利用 [Tevfik 1927: 456-457; ML 2: 646]。
- vii) からすの豌豆。豆類に属し、飼料として利用 [Tevfik 1927: 456; ML 4: 650; Derleme V: 1864]。
- viii) 如何なる作物か不明。A期において fig の収穫が登録された村では、B期においては iza が fig に替わって登録されている (fig と iza の öşür が並んで記載されているのは1/7村のみ)。それ故小論では、iza は fig を指す俗語と考え、fig そのものであると見做すこととする。なお Derleme は、iza の形で、Mudurnu や Gölpaazarı 周辺では kabuklu buğday や arpa を意味すると述べている [Derleme VII: 2499] が、iza との関係は不明である。
- ix) B期の穀類減産は、各地で見られる [Öz 1999: 89-92; Arıkan 1988: 104-105; Çınar-Gümüşcü 2002: 168-169]。
- x) burçak は、他地域においても急増している [Ünal 1999: 105; Çınar-Gümüşcü 2002: 168]。

Gümüşcü 2002: 167-168]。

さて以上の如き考えに基づき算出すると、表Ⅲaの如くなる¹¹⁾。B期の大麦の激減、C期における雑穀及び豆類の急増が目を引く。

なお20世紀初頭については、表IVaを見よ。

11) 研究者達は、検地帳に記された収穫量は実際に収穫された量ではなく、あくまでも当時の傾向を反映した凡その量であると理解している [Öz 1999: 79; Kütükoğlu 2000: 144]。

2 税

sipahiの収入に当たる hasil, 換言すれば reaya が納める税は, 現物納と貨幣納の2種類から成る [İnalcık 1994 1 : 71; Faroqhi 1984 : 204]。

ただ個々の税が, 現物, 貨幣の何れで徴収されたのかについては, 判断の難しいところである。そこで小論では, Barkan, Ö. L. -Meriçli, E. による分類 [HTD: Göynük Kazası Cedvel No. 2] を基に, 一応容積表示 (müd, kile) の場合には現物納, 金額 (akçe) の場合には貨幣納であったと仮定して検討することとする。また各作物 (1 müd) の評価額についても, 彼等により作成された評価額表 [HTD: 64] を利用する¹²⁾。ただ, darı, burçak, 豆類については時期によっては明示されておらず, また fig, iza については全く言及されていない。そこでこれらの評価額については, 前後の時期のそれを参考にしつつ仮に幾らかの数値を想定して, それに基づいて各時期における各村の hasil を算出しそれに拠り得られた額と, 検地帳に記載された hasil 額とを照合して, 最も妥当であると思われる数値を評価額として設定することとする¹³⁾。また, 校訂者はB期における小麦1 müd を70/80 akçe, 大麦1 müd を45/50 akçe としているが, これに基づくと3割程度の村々の hasil が検地帳記載のそれよりもかなり高額なものとなる。そこで私は, やはり検地帳の hasil により近似させることが重要であると考え, 試算の結果60/80 akçe (小麦), 40/50 akçe (大麦) に改めることとする。このような作業を通して得られた各作物の評価額は, 表Ⅲbの如くなる¹⁴⁾。

表Ⅲb 作物の評価額 (単位: akçe)

	小麦	大麦	yulaf	darı	mahlut ¹⁾	burçak	fig	iza	mercimek	nohut
A	60	40	30	40		40	40		40	40
B	60-80	40-50	30	30		45	45	30	50	50
C	120	60	30	60	60	60	60		120	120

i) 評価額に拠り小麦とyulafが1:2の割合で混合されたと考えられ, また他の作物の評価額をも考慮して60 akçeと見做した。隣のYenice-i Taraklu郡でも60 akçeである [HTD: 342]。

12) 目下のところ, 検地帳における評価額と市場価格との関係については, 直接的な関連性はなかったとする捉え方が一般的である [Öz 1999: 92; Cohen-Lewis 1975: 7-8; İslamoğlu-İnan 1994: 36]。

13) 例えばKöstek村(A期)の場合, 小麦16 müd (960 akçe), 大麦16 müd (640 akçe), çift税517 akçe, bād-i hevā 65 akçe, 巢箱税10 akçe, 羊税300 akçe, öşr-i meyve 130 akçe, 1 çiftlik-i hassa 100 akçeとfig 1.5 müdでhasil 2782 akçeと記されている [HTD: 519] ことから, fig 1 müdが40 akçeと考えられる。なお検地の際, 穀類はその収穫量は記されるが, 評価額は書き込まれない。これはsultanによって決定されるからである [AKG 1 : 374-375; HTD: 47]。

14) この評価額に基づき算出された各村の hasil は, 検地帳記載のそれに対して平均A期=99.5%, B期=101.1%, C期=101.4%となり, はば近似することとなる。なおこれらの誤差については, 1) 当時の書記官の誤記(例: Osmanlar村のC期の水車税額 [HTD: 527]), 2) 校訂者に拠る誤記(例: Çatacık村のB, C期のbād-i hevā額 [HTD: Göynük Kazası Cedvel No. 2]), 等が主要因として挙げられる。

表IIIc hasıl 額 (単位: akçe)

項目 ^{xiii)}	A	B	C	項目	A	B	C	
現物納	小麦	41,700	45,815	73,674	çayır 税 ^{vii)}	70	154	797
	大麦	25,000	21,668	27,402	yaylak 税 ^{ix)}	450	733	2,062
	yulaf	1,869	2,775	10,803	水車税 ⁱ⁾			1,830
	darı	140	1,410	7,305	mercimek ^{x)}	20	149.5	1,838
	mahlut	0	0	15,432	nohut ^{x)}	140	217.5	240
	burçak	640	776	12,650	小計	30,029	32,941	88,600.5
	fiğ	800	268	30	piyaz ^{xi)}	35	90	1,170
	iza	0	390	0	zafran ^{xii)}	1,320	659	607
	水車税 ⁱ⁾	1,610	2,395		öşr-i meyve ^{iv)}	1,562	2,873	2,371
	合計	71,759	75,497	147,296	ceviz	270	197	1,024
	64.8%	64.0%	59.6%	amrud	430	220	320	
貨幣納	çift 税 ⁱⁱ⁾	20,325	19,581	38,344	その他	5,283	5,549.5	5,623
	bād-i hevā ⁱⁱⁱ⁾	2,267	2,441	23,772.5	合計	38,929	42,529.5	99,715.5
	öşr-i bağ ^{iv)}	145	360	6,256		35.2%	36.0%	40.4%
	öşr-i bostan ^{v)}	678	891	3,527	総合計	110,688	118,026.5	247,011.5
	巢箱税 ^{vi)}	751	1,068	2,853		100%	100%	100%
	羊税 ^{vii)}	5,183	7,346	7,081				

- i) C期では小麦, 大麦各1 müd (1年間稼働の場合) から, 60 akçe に改められた [BK: 26 v̄- 27 f; AKG 7: 434].
- ii) çift 税 = 33 akçe, nim-çift 税 = 16-17 akçe, ekinlü bennak 税 = 12 akçe, bennak (耕地無保有者) 税 = 9 akçe, mücerred 税 = 6 akçe [AKG 2: 186; 7: 309; BK: 23 f- 25 f]. ただ本表の çift 税総額は, [HTD: Göynük Kazası Cedvel No. 2] に基づくが, C期については各村の çift 税総額の中には含まれていない, 即ち Cedvel No. 2 の数値には含まれていない haric raiyyat の耕作税 (約 5,692 akçe) をも加えたものである。同税は, 当時 Göynük の町等を hass として授与されていた Mehmed Paşa (Selim II世の lala で, Şam beylerbeyisi を務め, kıbrıs 遠征を指揮した [SO 3: 377; MD 12/ I: 356-357]) の手元に納められ [HTD: 508], それ故 timarlı sipahi 保有の各村の hasıl には含まれなかったものと考えられる。恐らくこれは隣の Bolu 県同様 [HTD: 508; BAR: 28], A期以前の同郡でも, 一部の timarlı sipahi の çift 税を subaşı が取得するという慣習が存在し, 他方元米 subaşı の zeamet であった Göynük の町の収入が, A, B期に比べC期では 5,000-6,000 akçe 減少したためであろう。
- iii) tayyarat と呼ばれ, 花嫁税, 罰金等の, 臨時に入る税を総称した語句 [Ünal 1989: 147-151]. 検地帳には, 例えば nisf-i bād-i hevā 30 akçe, resm-i arusane ve tapu-yı zemin ve deştibanı 40 akçe と記されており, 2つの合計 70 akçe が bād-i hevā の額と見做されている。なお kanunname の規定に拠ると, 残り半分の 30 akçe は sancak beyi もしくは subaşı (C期においては Mehmed Paşa?) の手元に収められたようである [AKG 2: 187].
- iv) 収穫状況に基づく徴収, dönüm akçesi の賦課等, 徴収方法は様々であった [BAR: 79; AKG 2: 187] が, 貨幣納が一般的だったようである。なお税制上の用語の不統一により ([Kütükoğlu 2000: 155] 参照), öşr-i bağ と öşr-i meyve の違いについては不明。
- v) 菜園税。徴収方法は様々 (dönüm に基づく賦課, 市場での売却に伴い徴収等) [BAR: 59, 270, 290] で, 詳細については不明 ([Kaldy-Nagy 1968: 203-204] 参照)。
- vi) 2 巢箱毎に 1 akçe 徴収される [BK: 32 f].
- vii) 2 頭毎に 1 akçe 徴収される [AKG 2: 187].
- viii) 草地から草を刈り取った場合に徴収される。Silistre 県では 1 荷車毎に 2 akçe [BAR: 273].
- ix) otlak 税とも呼ばれる。羊等の群れが他の timar 保有者の草地で牧草を食んだ場合に徴収される。一般的には上質の群れ (恐らく 300 頭程度) 毎に, 1 頭の羊か 20 akçe [BK: 37 v̄- 38 f].
- x) mercimek, nohut は, akçe による表示が主体となっており, 貨幣納として扱う。
- xi) C期においてのみ現れる。Bostan, M. H. は, 乾燥玉葱と理解している [Bostan 2002: 491].
- xii) 元来同郡ではかなり栽培されていたようである [İbn Battuta 1969: 138] が, 次第に減っている。
- xiii) 詳細については [Çağatay 1947: 483-511], また徴収時期についても, 前掲書及び [HTD: 80-81] を見よ。

そしてこれに基づき、現物及び貨幣納各々の hasıl 額を算出し、まとめたものが表Ⅲc である。これに拠ると、A, B, C 各期における両種の占める割合には大きな変化は見られないものの、貨幣納のそれが徐々に大きくなっていることが窺える¹⁵⁾。中でも bād-i hevā, öşür-i bāg, mercimek 等の増加には目を見張るものがある。

V 耕地利用の実態と背景

1 耕地利用の実態

本節では、20 世紀初頭の状況を参考にしつつ¹⁶⁾、15-16 世紀における各作物の単位面積 (1 çift) 当たりの収量を確定し、前章で提示された収穫量を基に作付面積の算出を試み、当時の耕地利用の実態を把握する。ただそのためには、未だに不明瞭な müd の大きさ¹⁷⁾ について、明確にしておかなければならない。そこで、まず müd の大きさに関する検討から始めることとする。

本検地帳で利用されている 1 Bursa müdü の大きさ (小麦基準) については、これまでのところ İnalçık, H. が約 307.9 kg, Koç, Y. 等が約 87 kg と唱え、未だに意見の一致を見ていない¹⁸⁾。実際どれ程の大きさであったのだろうか。結論から述べると、私は後者の意見に

15) 勿論これら以外にも、avariz や様々な奉仕が課せられていた。建艦用の帆や帆桁の木材伐採及び İznikmid への運搬 [MD 6 : 238, 294], 20 hane につき 1 人の kürekçi 供出 [MD 7 / 1 : 242] 等である。しかもこのような奉仕は、現金と引き替えに免れ得た [MD 5 : 334, 599, 623, 675 ; 6 : 489, 506, 519] ようで、貨幣の需要度の高まりが推察される。恐らく bennak が急増した C 期の reaya の多くは、現金獲得に苦慮したことであろう。

16) 先学も 20 世紀初頭の諸資料の有用性を指摘している [Faroqhi 1983 : 233]。小論では 1905 ZI, 1907 ZI, 1911 ZI, 1926 ZI, 1927 ZI 及び Güran, T. [同 1998 : 97] に拠り紹介された 1909 年の一部情報を利用することとする。これらは年によりその内容が少々異なるものの、各県或いは郡における穀類、豆類、果樹等の播種量、作付 (栽培) 面積、更には家畜の頭数等、当時の農業諸情報を我々にもたらしてくれる。Stratil-Sauer, G. は、1926 年以前の調査は非科学的であり信用できないと述べている [同 1933 : 325]。確かに客観的に考えてあり得ないような数値が記載されている場合もある。しかし、長らく農業技術上の大変革は生じなかったとされており、事実 1909-10 年の Bolu 地方に関する報告を見ても、耕耘等の農作業は 100% karasaban で行われている有様である [OMZB 1911 : 1060]。それ故やはり 20 世紀初頭における諸情報は、慎重に利用すれば大変有用なものであると考えられる。

17) müd は、穀類等の計測に使用される単位 (容積) で、1 müd が 20 kile に相当することについては各地共通している [Hinz 1955 : 50-51 ; İnalçık 1983 : 324] が、müd それ自体の大きさは全く様々である [TT / I : 189 ; İnalçık 1994 : xl]。これらの中、İstanbul müdü は中央政府が使用する単位で、各地の küçük müdü に対して büyük müdü とも呼ばれ [MD 12 / I : 313], 小麦 1 İstanbul müdü は 513.12 kg, 大麦 1 İstanbul müdü は約 445 kg と見做されている [Hinz 1995 : 57-58]。

18) まず 1955 年に、El-Ömeri の伝える情報に依拠して、Hinz, H. により約 87 kg であることが紹介された [Hinz 1955 : 57]。その後 İnalçık, H. は 512.8 kg [同 1987 : 166] と述べ、更にこれを 307.9 kg [同 1994 / 1 : xl] に訂正した。ただ彼は、何れの場合にもその根拠を明示していない。そこでこの両説について検討を行った Koç, Y. は、現在までに知り得た情報に拠れば、前者がより妥当なものであると結論付けた [同 2000 : 541-561]。

表IVa 20世紀初頭の生産性：

		小麦	大麦	yulaf	darı	
全 国	重量 ⁱ⁾	重量 (kg/kile [40 ℓ])	30.2	21.7	18.7	25.1
		対小麦比	1.00	0.72	0.62	0.83
	1907-08	作付面積 (ha)	3,463,794.8	1,848,855.9	215,291.1	233,948.5
		播種量 (kg/dönüm)	13.8	10.1	10.6	3.7
		収穫量 (kg)	2,959,501,852.0	1,454,897,196.7	206,731,442.2	148,014,072.3
		収穫倍率 (倍)	5.38	6.67	8.28	19.06
		生産性 (kg/ha)	859.4	791.6	965.9	636.4
	1909	生産性 (kg/ha)	829.7	989.9	857.3	
	1911	作付面積 (ha)	3,750,604.2	1,658,950.1	190,003.3	63,184.0
		播種量 (kg/dönüm)	13.2	13.3	11.5	4.1
		収穫量 (kg)	3,738,464,830.7	1,796,183,395.9	205,601,687.1	61,339,372.8
		収穫倍率 (倍)	6.30	6.65	8.72	15.33
		生産性 (kg/ha)	1,013.8	1089.1	1088.5	976.6
	1926	作付面積 (ha)	3,255,305.0	1,405,568.1	176,482.7	95,726.4
		収穫量 (kg)	2,469,226,847.0	1,432,735,070.0	102,529,085.0	138,565,036.0
		生産性 (kg/ha)	758.5	1,019.3	581.0	1,447.5
	1927	作付面積 (ha)	2,057,326.7	928,639.5	96,137.5	102,862.1
		収穫量 (kg)	1,333,150,811.0	629,280,734.0	59,187,862.0	78,122,910.0
		生産性 (kg/ha)	648.0	677.6	615.7	759.5
	平均	播種量 (kg/dönüm)	13.5	11.7	11.1	3.9
収穫倍率 (倍)		5.84	6.66	8.50	17.20	
生産性 (kg/ha)		821.9	913.5	821.7	955.0	
Göynük 郡	重量 ⁱ⁾	重量 (kg/kile [40 ℓ])	30.7	25.6	16.6	32.0
		対小麦比	1.00	0.83	0.54	1.04
		対全国比	1.02	1.18	0.89	1.28
	1907-08	作付面積 (ha)	7,215.1	2,886.0	288.6	72.2
		播種量 (kg/dönüm)	9.9	8.2	5.3	1.2
		収穫量 (kg)	4,608,000.0	1,536,000.0	99,840.0	41,600.0
		収穫倍率 (倍)	6.00	6.00	6.00	43.33
		生産性 (kg/ha)	642.4	535.4	348.0	579.6
	1911	作付面積 (ha)	6,493.5	1,443.0	173.2	
		播種量 (kg/dönüm)	18.5	18.0	13.3	
		収穫量 (kg)	5,536,972.8	2,511,667.2	249,600.0	
		収穫倍率 (倍)	4.24	8.92	10.00	
		生産性 (kg/ha)	857.7	1,750.8	1,449.9	
	1927	作付面積 (ha)	4,174.4	1,375.6	155.3	0.5
		収穫量 (kg)	3,144,340.0	1,570,984.0	75,763.0	216.0
		生産性 (kg/ha)	753.2	1,142.4	487.4	470.0
	平均	播種量 (kg/dönüm)	14.2	13.1	9.3	1.2
		対全国比	1.04	1.12	0.84	0.31
		収穫倍率 (倍)	5.12	7.46	8.00	43.33
		対全国比	0.88	1.12	0.94	2.52
生産性 (kg/ha)		751.1	1,142.9	761.8	524.8	
対全国比	0.91	1.25	0.93	0.55		

i) [1907 ZI] では、1 kile (1 kile = 40 ℓ) 当たりの重量が kıyye (約 1.23 kg [Hinz 1955: 30]) で地方の情報については除く。

全国と Göynük 郡の状況

mahlut	burçak	fiğ	その他の穀類	豆類及び工芸作物	合計
	29.4				
	0.97				
	153,089.9		1,090,723.0	633,281.7	7,638,984.9
	9.7				
	115,783,308.7				
	7.24				
	760.8				
	123,468.3	26,641.3	896,839.9	748,664.7	7,458,355.9
	9.2				
	97,911,846.4				
	9.54				
	797.7				
32,752.8	82,664.1	15,024.5	599,167.5	574,287.0	6,236,978.1
31,764,770.0	72,557,744.0	16,687,496.0			
969.8	877.7	1,110.7			
	62,030.7	12,391.2	408,161.1	405,302.4	4,072,851.2
	39,305,518.0	9,638,538.0			
	633.6	777.9			
	9.5				
	8.39				
969.8	767.5	944.3			
	34.6				
	1.13				
	1.18				
	288.6		721.6		11,472.1
	11.1				
	172,800.0				
	5.00				
	602.4				
	86.5	360.8	578.0	91.1	9,226.1
	11.1				
	138,240.0				
	13.30				
	1,607.6				
	158.8	179.1	832.1	176.3	7,052.1
	136,220.0	143,186.0			
	857.3	799.5			
	11.0				
	1.16				
	9.15				
	1.09				
	1,022.4				
	1.33				

示されている。なお平均重量算出に当たっては、[1907 ZI] の他 [1911 ZI] も利用した (Siria, İrak

同意するものである。何故なら、彼の適切な説明 [Koç 2000: 541-561] はもとより、1) İstanbul hassı に関する kanunname の規定 [AKG 1: 473-474; 2: 320] に拠ると、同地では 1/3 çift (前後の文脈から同地は上質地であることが分かる。İstanbul 地方における上質地の広さは不明だが、一般的には 70 dönüm 前後で 1 çift とされている。) の広さに、1 İstanbul müdü の小麦の播種が義務付けられている。ただこれは中質地の場合に置き換えると、 $1/3 \text{ çift} \times 100/70$ で約 0.48 çift に 1 müd の小麦が播種されることを意味する。因みにこの事柄は、1 çift = 2 İstanbul müdü lüğü とする Öz, M. の説 [同 2002: 1643-1651] に符合するものである。一方 Koç, Y. も言及した如く、1 çift が 12 Bursa müdü の小麦が播種される広さであることについては、本検地帳においても確認される [HTD: 234]。これは換言すれば 1/12 çift、即ち約 0.08 çift に 1 müd の小麦が播種されることを意味している。この両者を比べると、前者の müd の大きさが後者のその約 6 倍に当たることが分かる。1 İstanbul müdü は約 513.12 kg と見做されている [Hinz 1990: 58] ことから、1 Bursa müdü の大きさが約 87 kg というのは、ほぼ妥当な数値であると考えられる、2) 15-16 世紀の小麦の収穫量と 20 世紀初頭のそれとを比較した場合、İnalçık, H. の説に従うと前者の収穫量があまりにも高くなり過ぎると考えられる (注 22 参照)、からである。それ故、小麦 1 müd は 87 kg と見做すこととする。ただ周知の如く、小麦とそれ以外の作物は各々その重量を異にしている。他の作物の重量に関しては、1907 ZI 及び 1911 ZI が有用である。とりわけ前者では、収穫された各穀類について、各郡毎に 1 kile 当たりの重量を明示してくれている (表 IVa 注 i 参照)。勿論 400 年前後の隔たりがあり多少の変化は予想されるものの、貴重な情報である。なお mahlut, fig (iza) については情報が見当たらないが、別の方法で検討を試みる。ただし豆類等 (やはり重量不明) については除外する。限られた広さと考えられ、行論上特に問題はないと思われる。

では各作物は、1 çift 当たりどれ程の生産性を有していたのであろうか。前述した如く、20 世紀初頭のそれを基に考えることとする。トルコで近代的な農業統計書作成が始まったのは H. 1323 (1905-06) 年のことと思われ、3 年後 Europe 領域に関するそれが完成している。これに拠ると、小麦 = 1,226.4 kg/ha; 大麦 = 1,173.7; yulaf = 979.1; darı = 1,058.5; burçak = 1227.8 となっている [1905 ZI: 5]。ただこの作成を担当した「森林、鉾山及び農業省 (Orman ve maadin ve ziraat nezareti)」(以降 OMZN と略す) は、その解説部分において、この生産性は周辺諸国と比べ 20~30% も高く、現実を反映したものではなく、このような結果となったのは、作付面積が少な目に申告された (調査は申告制) ため、それ故この結果を利用して当時のより現実的な生産性を得るためには、作付面積が同地方の地理的面積において占める割合を、現状の 7.27% から 12~14% 程度にまで引き上げる必要があると述べている [1905 ZI: 5-س-س]。即ち、各作物の作付面積を $\times 1.45 \sim 1.69$ する必要があるというのである。そこでこのような処理 (便宜上両数値の平均値である $\times 1.57$ を行う) を行ったところ、小麦 = 785.8 kg/ha; 大麦 = 752.0; yulaf = 627.3; darı = 678.2; burçak

= 786.7 となる。大麦のそれが少々低いようにも思われるが、前近代的な調査とはいえ 1897 年の全国平均は小麦 = 870.0 kg/ha, 大麦 = 783.0 kg/ha と報告されている [Güran 1998: 97]。前述した処理の妥当性についてはなお判断を下しかねるものの、当時の識者の意見として一応受け入れることとする。

ところで、私が 20 世紀初頭における生産性の全国平均を求めるに当たり利用する 1907-08, 1909-10, 1911, 1926, 1927 年の 5 ヶ年の調査結果の内、前者 3 ヶ年のそれは、前述の 1905 ZI と同水準の生産性を示す。Güran, T. はこれらの数値には当時の政府による作為が込められていると述べている [同 1998: 96]。この真偽については確認する術も無いが、引続き 1907 ZI (Asia 領域が中心) の作成に当たった OMZN が、今回は前回の如き分析解説を述べていないのは、Güran, T. が示唆した事柄を暗に物語っているようにも思われる。何れにせよ、領域こそ異なるものの、調査、統計方針や方法等において、1905 ZI のそれを踏襲したものであることはほぼ間違いあるまい。それ故、3 ヶ年の各作物の作付面積についても、1.57 倍した上で利用することとする。

さてこのようにして得られた生産性及びその他の情報については、表 IVa を御覧頂きたい。本表の平均生産性を、1905-06 年 (Europe 領域のみの統計ではあるが) 及び 1927-36 年の全国平均 (表 IVb 参照) と比較すると、5 ヶ年のそれは何れの作物に関しても丁度 1905-06 年と 1927-36 年のそれとの間に位置し (1905-06 年の yulaf と dari の生産性がかなり低くなっているのは、地域性、並びに作付面積の狭さによるものであろう)、特に後者とほぼ同水準にあることが分かる¹⁹⁾。即ち表 IVa の平均生産性は、当時の一般的な水準と考えられるのである。なおこのような比較、検討から、作付面積を 1.57 倍することについても、妥当な処理であることが確認される²⁰⁾。

では次に、Göynük 郡の生産性について考えてみる。やはり表 IVa を御覧頂きたい。同時期に当たる 5 ヶ年の全国平均値と比較すると²¹⁾、高低の開きはあるものの、何れの作物についても許容し得る水準にあると考えられる。ただ僅か 3 ヶ年の資料に拠り算出されたもので

表 IVb 1927-36 年の生産性 (単位: kg/ha)

小麦	大麦	yulaf	dari	mahlut	burçak	fig	備考
856.7	975.5	833.8	960.3	997.1	662.4	823.3	[TG]

19) 1940 年代の中央 Anatolia でも、小麦は 5 倍程度の収穫量であった [Stirling 1965: 44]。また当時の生産性も全国平均で約 855.5 kg [TG 2001: 8] であった。

20) なおこれは重要であり、別の角度からも確認して置く。1933 年頃まで国土面積に占める作付地 (穀類以外も含む) の割合は、8%前後であった (表 IVc)。× 1.57 倍に拠り算定された 1907-08 年、1911 年のそれは少々高めとはなっているが、許容範囲内の誤差と理解される。また 1 dönüm 当たりの播種量は、小麦で約 13.5 kg (表 IVa) となり、これは Koç, Y. [同 2000; 544] や Öz, M. [同 2002; 1644] が提示したそれにほぼ匹敵する。

21) dari については、2 ヶ年の情報のみで、しかも 43.33 倍の驚くべき高収量 [1907 ZI: 108]、或いは僅か 0.5 ha の作付状況 [1927 ZI: 7] であることから、比較は困難で、別に検討する。

表IVc 20世紀前半の国土に占める作付地（豆類、工芸作物等も含む）の割合（単位：％）

1907-08	1911	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	備考
10.0	9.1	7.2	8.1	5.3	8.2	7.9	8.2	8.4	7.3	8.0	9.0	9.5	10.5	[TG]

あることから、別の角度からも検討を加えて置く必要がある。そこで5ヵ年の全国の生産性の平均値を基準にして、全国と Göynük 郡との間における各作物の播種量比及び収量倍率比（表IVa）を利用して、同郡の生産性を求めることとする（例えば小麦の場合、 1.04 [Göynük 郡の対全国播種量比] $\times 0.88$ [対全国収量倍率比] $\times 821.9$ [全国平均生産性] =）。そうすると小麦 = 752.2 kg/ha ；大麦 = $1,145.9$ ；yulaf = 648.8 ；burçak = 970.4 となり、yulaf を除き前述したものとほぼ同程度の結果が得られる。yulaf における差異は、やはり全国、同郡共にその作付面積の狭さによるものと思われ、一応小論では前述した数値とこの数値との平均値を同郡の生産性（ 705.3 kg/ha ）と見做すこととする。なお darı については、資料の不十分さ故に1907-08年と1927年における対全国生産比の平均値 $\{[579.6/636.4 + 470.0/759.5]\} \div 2 = 0.77$ ； $955.0 \times 0.77 = 735.4$ ，及び前述の処理に抛り得られた数値（ $0.31 \times 2.52 \times 955.0 = 746.0$ ）との平均値を、生産性（ 740.7 kg/ha ）と見做すこととする。これに抛ると、全国平均に比べ、少々低めながらも小麦と yulaf は同程度の、darı は低い、大麦と burçak は高い生産性を有していたことが分かる。なお小麦の生産性を1とした場合、大麦 = 1.52 ；yulaf = 0.94 ；darı = 0.99 ；burçak = 1.36 となる。

さてこのようにして算出された20世紀初頭における Göynük 郡の生産性を基に、15-16世紀の同郡のそれを検討する。まず主要作物であり、僅かながらも情報が存在する小麦について検討する。15-16世紀における小麦の収量は、一般に約4倍（4倍 [永田1998:169]；3-4倍 [Öz 2002:1644]）とされている。20世紀初頭における同郡の対全国収量倍率比は0.88である（表IVa）ことから、この比率に照らして、15-16世紀の同郡のそれを 4×0.88 で3.52倍と見做すこととする。さて、A、B、C3期に亙る1çift当たりの平均収穫量は9.85 müdである（表IIa；表IIIa）。それ故、1çift当たり2.80 müd即ち248.47 kg（ $2.80 \times 87 \text{ kg} \times 1.02$ ）播種されたこととなり、2.80 müdを2.80 müdlük（1 müdlük = 8.33 dönüm ）に播種したことから、1 dönüm当たりのそれは $248.47 \div (2.80 \times 8.33)$ で 10.66 kg となる。播種量としては不自然さを感じさせない数値である。そこで1 ha（1 ha = 10.88 dönüm ）全面に播種したと仮定すると、その収穫量は $10.66 \times 10.88 \times 3.52$ で 408.3 kg ，換算して 42.3 müd/çift となる。なお当時の全国平均を4倍と見做せば、1 dönüm当たりの播種量は $87 \text{ kg} \times 12 \text{ müdlük} \div 100$ で 10.4 kg ，そして $10.4 \times 4 \times 10.88$ で全国生産性は 452.6 kg/ha となり、同郡との比率は $1.00 : 0.90$ となる。これは20世紀初頭の $1.00 : 0.91$ （表IVa）に匹敵するものであり、前述の数値はほぼ妥当なものと理解して差し支えあるまい²²⁾。

22) A、C期と1927年の小麦収穫量とを比較して見る。各々収穫量は、 $493,394.4 \text{ kg}$ ； $435,855.4 \text{ kg}$ ；↗

次いで大麦について検討する。大麦の収量倍率は、20 世紀初頭において小麦よりも 1.46 倍高い (表 IVa)。それ故小麦に準拠すると、15 - 16 世紀においては 5.14 倍ということとなる。平均収穫量は 7.63 müd であることから、1 çift 当たりの播種量は 1.61 müd, 即ち $\{1.61 \times (87 \text{ kg} \times 1.02 \times 0.83)\}$ で 118.58 kg となる。一方 20 世紀初頭における対小麦播種量比が 0.92 であることに準ずると、15 - 16 世紀の 1 dönüm 当たりのそれは $10.66 \text{ kg} \times 0.92$ で 9.81 kg となり、播種面積は $118.58 \div 9.81$ で 12.09 dönüm となる。それ故その生産性は、 $118.58 \times 100 / 12.09 \times 5.14$ で 5041.4 kg/çift, 即ち換算して 68.5 müd/çift (548.6 kg/ha) となる。20 世紀初頭における対小麦生産性比 (1.52) に比べ少々低い (1.34) が、これは許容し得る誤差と考えられる。

次いで両穀物以外の作物の検討に移る。これらについては、全く情報が伝えられていない上に、収穫は C 期に集中している。そこで、前述した 20 世紀初頭における対小麦生産性比を利用して求めることとする。すると、yulaf = 383.8 kg/ha; darı = 404.2; burçak = 555.3, 換算して yulaf = 73.5 müd/çift; darı = 40.4; burçak = 50.6 程度となる。一方 mahlut については、前述した如き仮定 (表 IIIa 注 V; IIIb 注 i) の下に算出することとする。これまでの考察に拠り得られた両穀物の生産性に基くと、1 çift 当たり約 46 dönüm (小麦) : 54 dönüm (yulaf) の割合で作付されると、その収穫量は各々 19.5 müd (1,730.4 kg), 39.7 müd (1,902.4 kg) となり、ほぼ 1 : 2 となる。即ち mahlut の生産性は約 59.2 müd (439.2 kg/ha; 対小麦生産性比 = 0.97) となる。ただ混合播種は、本来その収穫量の増大を図り行われるものである。例えば 20 世紀前半における対小麦生産性比は 1.16 (表 IVb) となっている。実際どれ程の増加率であったのかについては、全く推測を許さないものではあるが、私は前述の例により 10% 程度は増加したのではないかと考える。そこで mahlut のそれは、 59.2×1.1 で 65.1 müd/çift と理解することとする。なお fig (iza) については、burçak (fig に酷似している) の生産性に準ずることとする。何故なら、burçak と fig の生産性比は 1 : 1.27 (1926 年全国), 1 : 1.23 (1927 年全国), 1 : 0.93 (1927 年 Göynük) となっており (表 IVa), 一見 1927 年の Göynük 郡の比が他と少々異なっているように見えるが、これは同郡における burçak の生産性が高かったこと (全国 : Göynük = 1 : 1.33) によるもので、両作物は同程度の生産性であったと考えられるからである。即ち 50.6 müd/çift と見做す。

↙ 3,144,340 kg である。一見大いに異なっているように見えるが、1) 作付面積 (A, C 期 = 42.3 müd/çift) は 131.4 çift; 116.1 çift; 454.2 çift であることから、A, C 期の収穫量を各々約 3.46 倍, 約 3.91 倍, 2) 20 世紀初頭の収量倍率は約 5.12 倍であることから、倍率上昇分として約 1.45 倍, 3) A, C 期の播種量約 10.66 kg に対して 1927 年のそれは約 14.2 kg であることから更に 1.33 倍すると、A 期 = 3,292,228.4 kg; C 期 = 3,286,539.3 kg となり、1927 年のそれにほぼ近似するのである。

表IVd 15-16世紀及び20世紀初頭における Göynük 郡の作付状況 (単位: çift)

	小麦	大麦	yulaf	darı	mahlut	burçak	その他 ⁱ⁾	合計	作付率	総作付面積 ⁱⁱ⁾
A	131.4	73.0	6.8	0.7		2.5	3.2	217.6	41.6%	262.7
	60.4%	33.5%	3.1%	0.3%		1.2%	1.5%	100%		
B	127.0	52.9	10.1	9.3		2.7	3.0	205.0	38.6%	261.7
	62.0%	25.7%	4.9%	4.6%		1.3%	1.5%	100%		
C	116.1	53.3	39.2%	24.1	31.6	33.3	0.1	297.7	53.3%	356.3
	39.0%	17.9%	13.2%	8.1%	10.6%	11.1%	0.1%	100%		
1907-08	785.0	314.0	31.4	7.9		31.4	78.5	1,248.2	50.0%	1,248.2
	62.9%	25.2%	2.5%	0.6%		2.5%	6.3%	100%		
1911	706.5	157.0	18.8			9.4	102.2	993.9	49.8%	993.9
	71.1%	15.8%	1.9%			0.9%	10.3%	100%		
1927	454.2	149.7	16.98	0.05		17.3	110.0	748.2	49.4%	748.2
	60.7%	20.0%	2.3%	0.0%		2.3%	14.7%	100%		

- i) その他としては、A, C期=fiğ; B期=fiğ, iza; 20世紀初頭=米, kaplıca, fiğ, mısırがある。
ii) 20世紀初頭の数値には、穀類以外 (burçak, fiğ は含む) の作付面積 (9.7 çift) は含まれていない。

表IVe 1 hane 当たりの耕地面積・作付面積ⁱ⁾ (単位: dönüm)

	A	B	C	20初
耕地面積	48.7	51.5	33.5	47.7
作付面積	20.3	19.9	17.9	23.7

- i) 本表の数値は、1) 経営規模として 50 dönüm 前後が必要 [Inalcık 1994/1: 148], 2) 小麦, 大麦の1日の播種面積は約 1 dönüm で、期間は2週間程度 (注5), という情報と符合する。なお 20世紀初頭における Bolu 県全体と同郡との 1 hane 当たりの作付面積比は (1:1.7 [1927 ZI: VII]), 後代 (1960年代中頃) における両者の間の 1 家族当たりの耕地面積比 (1:1.6 [KİB: 54-55]) とほぼ一致する。

さて、以上の考察に拠り割出された各作物の生産性と第Ⅲ章で提示された耕地面積 (* を付したもの) とを利用して、当時の作付状況を復元し、更にこの作業に拠り明らかとなった作付率を利用して、総耕地面積を基に各期の総作付面積を算出したものが表IVd である。

なお Öz, M. は、小麦を基準にして 15-16 世紀における収量倍率を究明している。それに拠ると、Anadolu, Rum 地方では平均 2.82 倍、更に地域を本郡に近く地理的環境が似通った Canik, Çankırı, Bolu に限ると平均 2.44 倍となる [同 2002: 1650-1651]。一方で彼自身平均 3~4 倍であったと述べている [同 2002: 1644] にも拘らず、非常に低い算定結果となっている。これは基礎的情報の操作方法にもよるが、やはりその主要因は彼が設定した作付率 (62.5%) によるものと思われる。これは高過ぎる (表IIa 注ix 参照)。そこで仮に Canik 等の倍率を本郡同様 3.52 倍に上昇させようとするれば、その作付率は 43.4% に設定する必要がある。少々低めながらも本郡の平均作付率 44.57% とほぼ同水準となるのである。それ故、数値設定等に多分に問題は存するものの、表IVd は著しく妥当性を欠くものとは考

えられない²³⁾。

なお 20 世紀初頭の総作付面積は、約 9,161.6 ha (約 996.8 çift) である (表IVa 参照)。

2 耕地利用の背景

表IVd 及びこれまでの考察結果に拠ると、1) A 期→B 期では、人口、耕地及び作付面積等に関して差ほど大きな変化は見られないが、B 期→C 期では人口が約 1.5 倍増加し、耕地面積の拡大が停滞する中、作付率は上昇し、作付面積は人口増加率にこそ及ばないもののがかなり拡大した、2) 小麦、大麦は主要穀物であったが、C 期では多種の作物が相当量栽培されるようになり、A、B 期に比べその作付割合を相対的に低下させた、ことが分かる。

ではこのような B 期→C 期における変化は、如何に理解されるべきであろうか。これはやはり第一に、人口増加に伴う生産欲求の高まりによるものと考えられる。前述した如く *darı* は収穫量が多く、とりわけ *mahlut* にいたっては正にその増大を図るために栽培されたものであり、*yulaf* は人間でも十分食せる。恐らく *burçak* の急増は、大麦、*yulaf* の食料化が進み、飼料不足を補うためであろう。

第二に、農業技術上の問題に負うところのものと考えられる。20 世紀初頭においてですら農耕具は原初的段階にあり、一般的に無肥農法であった [斎藤 1960: 102]。その上同郡は山間に位置し、大規模な開墾、連作等が行われたとは到底考えられない。それ故現有の耕地を有効利用して、しかも無肥農法で収穫量を高めようとするれば、当然のことながら適地適作が必須の事柄になったと思われる。また既に言及した如く、*reaya* の生活は貧困化した模様である。恐らく農耕に必要な大型家畜を保有できない者達が、増加したことであろう²⁴⁾。小麦、大麦に比べて手軽に、しかも痩せ地においても栽培可能な *darı*, *yulaf*, *burçak* 等の作付け増加は、このような事情によるものであろう。

第三に、経済環境の変化によるものと考えられる。貨幣需要の高まりは、なお全体に占める割合は低いものの豆類、果樹、玉葱等の収穫量の飛躍的増大をもたらし、穀物栽培に多少なりとも影響を及ぼしたと思われる²⁵⁾。

23) これまでの考察結果をも利用して、各 *hane* 当たりの経営規模を算出したものが表IVe である。そして以上の如き経営状況に拠り、とりわけ C 期における *reaya* の苦しい生活が、またこれに各期の *çiftlik-i muattal* の存在状況をも勘案すると、特に A、B 期における耕地の活用がなお不十分なものであったことが窺われる。

24) *Faroqi, S.* は、*Saideli* (16 世紀後半) 地方における保有地の欠如と牛の無保有との間の [同 1983: 237]、また *Güran, T.* も *Filibe* 県内 (19 世紀中頃) における、保有地の広さと保有家畜数との間の相関関係を指摘している [同 1998: 192]。

25) これらの増大は、同郡に留まらない [Ünal 1999: 110; Öz 1999: 94-95; 156; Gökçe 2000: 377; Bostan 2002: 495, 508; Karaca 2002: 256]。İçel 県では果樹栽培故に耕地が *bağ* に変えられ [BAR: 53]、また *İzник* や *Samsun* での玉葱の退蔵が *İstanbul* での不足を生ぜしめている [MD 5: 56, 148; 6: 92]。

以上の如く、両期間における変化は、reayaを取り巻く社会、経済上の変化に、当時の農業技術上の問題も絡み合い、現出されたものであると理解されよう²⁶⁾。

結 語

16世紀後半における人口増加及びそれに伴うOsman朝社会の変容については、これまでも先学により種々論じられてきた。例えば、Cook, M. A. は人口増加に耕地拡大が伴わなかったこと [同1972] を、或いはÖz, M. はreayaが貧困化したこと [同1997: 77-90] を明らかにしている。

小論での考察の結果、やはりGöynük郡でも16世紀後半の人口増加は著しく、耕地拡大はこれに伴わなかったことが判明した。そして各hane当たりの耕地面積は縮小し、貨幣の需要度も高まる中、reayaの生活が一層苦しくなったことも察せられた。ただその一方でこのような社会、経済上の変化に対して、当時有した農業知識を十二分に活かし、適地適作に基づくより有効な耕地利用により、作付地の拡大、並びに収穫量の増大を図り対応しようとするreayaの姿も浮かび上がってきたのである。

検地帳の分析を通して耕地利用の実態を追求したところ、以上の如き新たな一面が理解されることとなった。恐らく耕地利用の把握は、収量倍率や検地の際の計測単位 (müd) の究明²⁷⁾等においても、その有用性を発揮しよう。

[追記] 関係書物の御教示を頂いたばかりでなく、貴重な御蔵書を長期間に亙り快く御貸し下さった関西大学名誉教授末尾至行先生の御厚情に、深く感謝いたします。

参 考 文 献

AD: Şahin, İ. -Emecan, F. M. (1994) *II. Bâyezîd Dönemine Ait 906/1501 Tarihli Ahkâm Defteri*, İstanbul.

26) İslamoğlu-İnan は、人口増加に伴う耕地不足の中、reaya は休閑期間の短縮、新たな輪作体系の創造、灌漑設備の充実等により、耕地の有効利用を図ったと述べている [同1987: 115-117] が、実証性に乏しく、俄かには受け入れ難い。灌漑化率は1950年においてですら0.5%に過ぎず [末尾1989: 3]、休閑期間の短縮や輪作の普及は、potatoes, pancar 栽培が広まった20世紀以降のことと思われる [TCZ 1938: 68; Fazıl 1926/ 27: 151]。

27) 例えばLazıkıyye郡では1520/30年→1571年にhane数2.59倍、耕地面積1.32倍の増加に対して、öşür量はyulaf (0.1→41.1 müd) と darı (9.7→29.1 müd) 以外の他の総ての作物 (小麦=1,074.3→1,034.8 müd; 大麦=1,146.35→818.975 müd) で減少している。著者はこの数値に基づき両期の比較、検討を行っているが、客観的に考えて不自然なöşür量である [Gökçe 2000: 343-358]。

- AKG : Akgündüz, A. (ed.) (1990 – 94) *Osmanlı Kanunnâmeleri ve Hukukî Tahlilleri 1-8 kitap*, İstanbul.
- AT : Aşıkpaşazade Derviş Ahmed (1929) *Tevârih-i Âl-i Osman*, Giese, F. (ed.), Wiesbaden.
- BAR : Barkan, Ö. L. (ed.) (1943) *XV ve XVI inci asırlarda Osmanlı İmparatorluğunda Zirai Ekonominin Hukukî ve Malî Esasları cilt 1*, İstanbul.
- HTD : Barkan, Ö. L. –Meriçli, E. (ed.) (1988) *Hüdavendigâr Livası Tahrir Defterleri I*, Ankara.
- BK : Beldiceanu, N. (ed.) (1967) *Code de Lois Coutumières de Mehmed II*, Wiesbaden.
- KA : Tacızade Cafer Çelebi, *Kanunname-i arazi*, Türkiye Büyük Millet Meclisi KU 283/1.
- SNa : Evliya Çelebi (1986) *Seyahatnamesi*. Temelkuran, T. –Aktaş, N. (ed.) cilt I-X, İstanbul.
- SNb : " (1999) *Seyahatnamesi*. Kurşun, Z. –Kahraman, S. A. –Dağlı, Y. (ed.) 6 vols., İstanbul.
- HT : Hadidi (1991) *Tevârih-i Âl-i Osman (1299 – 1523)*. Öztürk Necdet (ed.), İstanbul.
- NT : Mehmed Neşri (1949/ 1957) *Kitâb-i Cihan-Nümâ I-II*. Unat, F. R. –Köymen, M. A. (ed.), Ankara.
- ST : Mustafâ Selânikî (1970) *Târih-i Selânikî*, Freiburg.
- SK : Pulaha, S. –Yücel, Y. (ed.) (1988) *Le Code (Kânunnâme) de Selim I^{er}et (1512-1520) et Certaines Autres Lois de La Deuxième Moitié du XVI^e Siècle*, Ankara.
- TT : Sadeddin, Hoca (1279) *Tac üt-Tevârih I-II*, İstanbul.
- MD : T. C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü
 " (1993) *3 Numaralı Mühimme Defteri (Tıpkıbasım)*, Ankara.
 " (1994) *5 Numaralı Mühimme Defteri (Tıpkıbasım)*, Ankara.
 " (1995) *6 Numaralı Mühimme Defteri (Tıpkıbasım)*, Ankara.
 " (1996) *12 Numaralı Mühimme Defteri (Özet-Transkription) I-II*, Ankara.
 " (1998) *7 Numaralı Mühimme Defteri (Tıpkıbasım) I-II*, Ankara.
- MVA : " (1995) *166 Numaralı Muhâsebe-i Vilâyet-i Anadolu Defteri (937/1530)*, Ankara.
- 1905 ZI : Orman ve Maadin ve Ziraat Nezareti (1908 – 09) *1323 senesi Avrupa-i Osmanî Ziraat İstatistiği*.
- 1907 ZI : " (1909 – 10) *1325 senesi Asya ve Afrika-i Osmanî Ziraat İstatistiği*.
- 1911 ZI : Ticaret ve Ziraat Nezareti İstatistik İdare-i Umumiyesi (1913 – 14) *Memalik-i Osmanîyenin 1329 senesine mahsûs Ziraat İstatistiği*.
- 1926 ZI : Ziraat Vekâleti İstatistik Müdüriyet-i Umümiyesi (1927) *1926 senesi Hububat-i Zeriya ve Mahsulatı*.
- 1927 ZI : Başvekâlet Merkez İstatistik Müdüriyet-i Umümiyesi (1928) *1927 senesi Zirai Tahrir Neticeleri*.
- OMZB : Orman ve Maadin ve Ziraat ve Baytar Nezareti (1911) *Orman ve Maadin ve Ziraat ve Baytar Mecmuası*. 13 – 14, İstanbul.
- Arıkan, Zeki (1988) *XV-XVI. Yüzyıllarda Hamit Sancağı*, İzmir.

- Barkan, Ö. L. (1951) Tarihi Demografi Araştırmaları ve Osmanlı Tarihi. *Türkiyat Mecmuası* X, 1 – 26.
- Barkan, Ö. L. (1951) “Daftar-i Khākāni” *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed.
BİİY : *Bilecik İl Yıllığı 1967* (1968), İstanbul.
- Birken, Andreas (1976) *Die Provinzen des Osmanischen Reiches*, Wiesbaden.
BİİY : *Bolu İl Yıllığı 1967* (1968), İstanbul.
- Bostan, M. Hanefi (2002) *XV–XVI. Asırlarda Trabzon Sancağında Sosyal ve İktisadi Hayat*, Ankara.
- Cohen, A. –Lewis, B (1975) *Population and Revenue in the Towns of Palestine in the Sixteenth Century*, Princeton.
- Cook, M. A. (1972) *Population Pressure in Rural Anatolia 1450–1600*, London.
- Çağatay, Neşet (1947) Osmanlı İmparatorluğunda Reayadan Alınan Vergi ve Resimler. *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih Coğrafya Fakültesi Dergisi* V/5, 483 – 511.
- Çınar, H. –Gümüşçü, O. (2002) *Osmanlıdan Cumhuriyete Çubuk Kazası*, Ankara.
- Dávid, Géza (1977) The Age of Unmarried Male Children in The Tahrir–Defters. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 31 (3), 347 – 357.
- Doğru, Halime (1992) *XVI. Yüzyılda Eskişehir ve Sutanönü Sancağı*, İstanbul.
- Emecan, F. M. (1989) *XVI. Asırda Manisa Kazası*, Ankara.
- Erder, Leila (1975) The Mesurement of Pre-industrial Population Changes — The Ottoman Empire from the 15th to the 17th Century. *Middle Eastern Studies* 11, 294 – 297.
- Faroqhi, S. –Erder, Leila (1979) Population Rise and Fall in Anatolia 1550–1620. *Midde Eastern Studies* 15, 322 – 345.
- Faroqhi, S. (1983) The Peasants of Saideli in the Late Sixteenth Century. *Archivum Ottomanicum* VIII, 215 – 250.
- Faroqhi, S. (1984) *Towns and Townsmen of Ottoman Anatolia Trade, crafts and food production in an urban setting 1520–1650*, Cambridge.
- Fazıl, İbrahim (1926/27) *Muhtasar İktisad Zirai*, İstanbul.
- Göğebakan, Göknur (2002) *XVI. Yüzyılda Malatya Kazası (1516–1560)*, Malatya.
- Gökçe, Turan (2000) *XVI–XVII. Yüzyıllarda Lazıköy (denizli) Kazası*, Ankara.
- Göyünç, Nejat (1979) Hane Deyimi Hakkında. *İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Tarih Dergisi* 32, 331 – 348.
- Göyünç, Nejat (1991) *XVI. Yüzyılda Mardin Sancağı*, Ankara.
- Gözenç, Selami (1985) *Land Utilization in the Transitional Zone between Central and Northern Anatolia in Bolu District. The Utilization of Water and Water Power in Turkey 95–107*, Yoshiyuki Suelo (ed.), Osaka.
- Gözenç, Selami (1979) *Bolu Depresyonu ve Yakın Çevresinde Araziden Faydalanma (Land-use)*, İstanbul.

- Güçer, Lütfi (1964) *XVI-XVII. Asırlarda Osmanlı İmparatorluğunda Hububat Meselesi ve Hububattan Alman Vergiler*, İstanbul.
- Güran, Tevfik (1998) *19 Yüzyıl Osmanlı Tarımı*, İstanbul.
- Hinz, Walther (1955) *İslamda Ölçü Sistemleri (çeviren Sevim, Acar 1990)*, İstanbul.
- İştıman, T. Z. (1938) *Bolu Coğrafyası*, İstanbul.
- İbn Battuta (1969) *Travels in Asia and Africa 1325-54*, Gibb. H. A. R. (tr.), Newyork.
- İnalcık, Halil (1959) Osmanlılarda Raiyyet Rüsümü. *Belleten* 13, 575 – 610.
- İnalcık, Halil (1983) Introduction to Ottoman Metrology. *Turcica* XV, 311 – 348,
- İnalcık, Halil (1987) *The Middle East and the Balkans under the Ottoman Empire*, Bloomington.
- İnalcık, Halil (ed.) (1994) *An Economic and Social History of The Ottoman Empire vol. 1-2*, Cambridge.
- İslamoğlu-İnan, H. (ed.) (1987) *The Ottoman Empire and the World-Economy*, Cambridge.
- İslamoğlu-İnan, H. (1994) *State and Pesants in the Ottoman Empire*, Leiden.
- Káldy-Nagy, G. (1968) The Administration of the Sanjâq Registrations in Hungary. *Acta Orientalia* 21, 181 – 223.
- Karaca, Behset (2002) *XV. ve XVI. Yüzyıllarda Teke Sancağı*, İsparta.
- Karpat, Kemal H. (2003) *Osmalı Nüfusu (1830-1914)*, İstanbul.
- Koç, Yunus (2000) Zirai Tarih Araştırmalarında Ölçü Tartı Birimleri Sorunu : Bursa Müdü Örneği. Uluslar Arası Kuruluşunun 700. Yıl Dönümünde Bütün Yönleriyle Osmanlı Devleti Kongresi 7 – 9 Nisan 1999. 541 – 546, Konya.
- Konrapa, M. Z. (1960) *Bolu Tarihi*, Bolu.
- Konuk, İsmet (1967) Bolu. *Bolu Öğretmeler Derneği Kültür Yayınları* No. 1, İstanbul.
- KİB : Köy İşleri Bakanlığı (1968) *Köy Envanter Etüdlerine göre Bolu*, Ankara.
- Kurdoğlu, Faik (1938) *Türk Ziraat Tarihine Bir Bakış*, İstanbul.
- Kurt, Yılmaz (1990) 1572 Tarihli Adana Mufassal Tahrir Defterine göre Adananın Sosyo-Ekonomik Tarihi üzerine Bir Araştırma. *Belleten* LIV / 209, 179 – 211.
- Kütükoğlu, Mübahat (2000) *XV ve XVI. Asırlarda İzmir Kazasının Sosyal ve İktisadi Yapısı*, İzmir.
- Mcgowan, B. (1969) Food Supply and Taxation on the Middle Danube (1568 – 1579). *Arcivum Ottomanicum* 1, 139 – 196.
- Mccarthy, Justin (2002) *Population History of The Middle East and The Balkans*, İstanbul.
- Miroğlu, İsmet (1975) *XVI. Yüzyılda Bayburt Sancağı*, İstanbul.
- Miroğlu, İsmet (1990) *Kemah Sancağı ve Erzincan Kazası (1520-1566)*, Ankara.
- Onur, Ayhan (1964) *Türkiyede Kar Yağışları ve Yerde Kalma Müddeti üzerine Bir Etüd*, Ankara.
- Orak, Hüseyin (1946) *Türkiye Kılavuzu I*, Ankara.

- Öz, Mehmet (1997) XVI. yüzyıl Anadolu'sunda köylülerin vergi yükü ve geçim durumu Hakkında bir araştırma. *Osmanlı Araştırmaları* XVII, 77 - 90. İstanbul.
- Öz, Mehmet (1999) *XV-XVI. Yüzyılda Canik Sancağı*, Ankara.
- Öz, Mehmet (2000) Agriculture in The Ottoman Classical Period. *The Great Ottoman-Turkish Civilisation* vol. 2, 32 - 40, Ankara.
- Öz, Mehmet (2002) XVI. yüzyılda Anadolu'da Tarımda Verimlilik Problemi. XIII. *Türk Tarih Kongresi III.* cilt-III. kısım, 1643 - 1651. Ankara.
- Özel, Oktay (1986) XV-XVII. Yüzyıllarda Osmanlı Toplumunda «Hariç Raiyyet». *Türk Dünyası Araştırmaları Dergisi* 43, 159 - 171.
- Stirling, Paul (1965) *Turkish Village*, New York.
- Stratil-Sauer, G. (1933) General Production in Turkey. *Economic Geography* vol. 9, 325 - 335.
- Sümer, Faruk : "Kayı" *İslâm Ansiklopedisi* VI, 461 a.
- SO : Süreyyâ, Mehmed (1890 - 93) *Sicil-i Osmâni*. 1 - 4, İstanbul.
- TA : *Tanzimattan Cumhuriyete Türkiye Ansiklopedisi* (1985) 1 - 6 cilt, İstanbul.
- Taştemir, Mehmet (1999) *XVI. Yüzyılda Adıyaman Sosyal ve İktisadi Tarihi*, Ankara.
- Tevfik, Ahmed (1927) *Ziraat Dersleri I*, İstanbul.
- TG : T. C. Başbakanlık Devlet İstatistik Enstitüsü (2001) *Tarımsal Göstergeler*, Ankara.
- KB : T. C. İçişleri Bakanlığı İller İdaresi Genel Müdürlüğü (1971) *Türkiye Mülki İdare Bölgeleri ve bunlara bağlı Köyler Belediyeler*, Ankara.
- TCZ : T. C. Ziraat Vekaleti (hazırlayan) (1938) *Birinci Köy ve Ziraat Kalkınma kongresi*, A-takım 12, Ankara.
- Ünal, M. Ali (1989) *XVI. Yüzyılda Harput Sancağı (1518-1566)*, Ankara.
- Ünal, M. Ali (1999) *XVI. Yüzyılda Çemişgezek Sancağı*, Ankara.
- Ünlü, A. Rıza (1925) *Tarih Boyunca Gerede* (reprint 2000), İstanbul.
- Venzke, M. L. (1997) The Ottoman Tahrir Defterleri and Agricultural Productivity. *Osmanlı Araştırmaları* XVII, 1 - 61. İstanbul.
- Yılmaz, Fikret (1999) Edremit Yayaları ve Yaya Teşkilatının Kaldırılması Hakkında Bilgiler. *Osmanlı Araştırmaları* XIX, 149 - 180. İstanbul.
- Tivy, Joy (小倉武一訳) (1994) 『農業生態学』養賢堂.
- 鳴沢 巖 (1960) 『経済地理学ノート』法政大学出版局.
- 斎藤一夫 (1960) 『トルコの農業経済』農林水産業生産性向上会議.
- 末尾至行編 (1989) 『トルコの水と社会』大明堂.
- 永田雄三 (1977) 16世紀トルコの農村——1531年サルハン県「検地帳」分析の試み——『東洋学報』58-3/4, 41-71.
- 永田雄三 (1986) 歴史の中のアーヤーン——19世紀初頭トルコ地方社会の反映——『社会史研究』7, 82-162.
- 永田雄三 (1998) 『成熟のイスラーム社会』世界の歴史 15, 中央公論社.

Derleme : *Derleme Sözlüğü* I-XII (1993), Ankara.

Ha : Harita Genel Müdürlüğü (1940 - 1953) : *Türkiye Haritası 1 : 200000*, İstanbul.

Hb : Müdafaa-i Milliye Vekaleti Harita Müdüriyet-i Umumiyesi (1927) : *Harita 1 : 200000*, İstanbul.

ML : *Meydan-Larousse* (1969 - 1985) 14 vols. İstanbul.

Redhouse, W. (1974) *Turkish and English Lexicon*. reprint, Beirut.

Sami, Şemseddin (1889 - 1898) *Kamus ül-Alām*. vol. 1 -6, İstanbul.

(香川県立高松高等学校)